

今回は「たすける」について見ていきたい。「たすける」には、「たすけたい」や「たすけん」に加えて、「たすけたさ」というかたちがある。「たすけたさ」は、「たすける」の連用形「たすけ」に、「たい」という希望の助動詞がついて、さらに「い」が落ちて、断定や念押しを示す終助詞「さ」がついたものと考えられる。

それでは、「たすける」は「何を」たすけるのであろうか。格助詞「を」に着目すると、「人を」(三号 32、十二号 90)、「せかいどうを」(四号 36、十五号 43、十七号 37)、「みな一れつを」(十五号 43)、「このよふを」(九号 28)、「りゆうけつくるを」(十三号 60)、「これを」(十三号 103)となる。また、「を」はないがその対象として考えられるものは「せかい」(四号 126、七号 100、八号 43、十二号 92)、「とのようなものも」(八号 55、八号 68)、「一れつわがこ」(十三号 85)、「にほん」(二号 33)、「いたみなやみもてきものも」(六号 106)、「むつかしきなるやまいでも」(六号 108、十二号 50)、「どんなやまいもいかなるの事であるふが」(十二号 128)などが挙げられる。このように、「たすける」対象には「人」や「せかい」など広く人を示すものや、「立毛を作ること」や「痛み」「悩み」「病」「事情」などが示されている。

「たすけたい」というかたちでは、説話者(親神)の思いを示している。四号 126 では、いわゆる「元初まりの話」をしたあとで、「この話は、ちょっとした事とは思ふなよ、世界中の人間をたすけたいから(するのである)」と述べて、また、七号 26 では「どのようなとき話をするのも、たすけたいという一心ばかりで」と歌われている。あるいは、話に限らず、「どのような事をするのも、たすけたい」(十二号 78)からであり、また十七号では次のようにも歌われている。

いまゝでハこのよはしめたにんけんの  
もとなるぢばわたれもしらんで (十七号 34)  
このたびハこのしんちつをせかへちうゑ  
どふぞしいかりをしゑたいから (十七号 35)  
それゆへにかんろふたいをはじめたわ  
ほんもとなるのところがなるのや (十七号 36)  
こんな事はじめかけるとゆうのもな  
せかいどうをたすけたいから (十七号 37)

37での「こんな事はじめかける」の「こんな事」には34の「このよはしめたにんけんのもとなるぢば」と36の「かんろふたい」の二つが掛かっていると考えられるが、そうして「はじめかける」のは、「世界中をたすけたいから」と説かれている。これは四号 126 とも直接的に通じていることである。

「たすける」は、「人をたすける心」と、「心」を修飾するかたちでも使われている。三号では子供の夜泣きが挙げられて、それはその子の親に対する神からの知らせであると述べて、次のように歌われている。

しんぢつに人をたすける心なら  
神のくときハなにもないぞや (三号 32)  
めへへにいまさいよくばよき事と  
をもふ心ハみなちがうでな (三号 33)

ここでは、「人をたすける心」の対照的なものとして、「銘々に今さえよくば良いと思ふ心」が挙げられている。また、十二号では、次のように歌われている。

いまゝでハせかいどううハ一れつに  
めゑへしやんをしてわいれども (十二号 89)  
なさけないとのよにしやんしたとても  
人をたすける心ないので (十二号 90)  
これから八月日たのみや一れつわ  
心しいかりいれかゑてくれ (十二号 91)  
この心どふゆう事であるならば  
せかいたすける一ちよばかりを (十二号 92)

ここでも、「銘々に」何か思案をしてはいるが、「人をたすける心」がないことが指摘されており、その心を入れ替えて「せかいたすける一ちよ」になってほしいことが告げられている。この「せかいたすける一ちよ」とは、上記のような親神の「せかいどうをたすけたい」という心であると考えられる。つまり、人間が何か思案する際の心持ちとして、親神の世界を「たすけたい」という心を持つように促されている。

このように人々の心の有り様を伝える上で、他動詞「たすける」が使われているのは、その対象を明確にするためであり、「我が身」から「人」へと心の向きを変えることに強調点があると考えられる。

さて、「病」を「たすける」ということに関して、次のような歌がある。

いまゝでハやまいとゆへばいしやくするり  
みなしんばいをしたるなれども (六号 105)  
これからハいたみなやみもてきものも  
いきてをどりでみなたすけるで (六号 106)  
このたすけいまゝでしらぬ事なれど  
これからさきハためしゝてみよ (六号 107)  
どのよふなむつかしきなるやまいでも  
しんぢつなるのいきでたすける (六号 108)  
月日よりしんぢつ心みさためて  
いかなしゆこふもするとをもゑよ (六号 109)

前回見た十号 20 では、自動詞の「たすかる」が使われて、「どのよふなむつかしくなるやまいでも／つとめ一ちよてみなたすかるで」と歌われており、「かんろふだいのつとめ」が促されていた。他方で、同じ「病」をテーマにしてもここでは他動詞の「たすける」が使われて、最後の 109 でその主体が「月日」(親神)だと示されている。105 で「心配」とあるように「痛み」や「病」に対する人々の心を励ます上で、他動詞「たすける」を用いて、その主体性を明示していると考えられる。これは 12 号の次の場合でも同じことであろう。

このさきをにちへ心いさめるで  
どんな事でもゆへばそのまゝ (十二号 60)  
どのよふにむつかしくよふみへたとて  
よふきつとめてみなたすけるで (十二号 61)